

竹——」「ハイ……お呼びでござりますか、若旦那」「何んぢやい、これは……」「これ、アノおもよんどで、若旦那のお給仕に参りました」「馬鹿云へ、こんなおもよがあるかい、これが山に居つたら、鐵砲で打たれてしまふで、猪と間違ふて、まだ日本にもこんな人間が残つて居るのやろか……兎も角、毎時のおもよをお越してンか」「アラツ、若旦那、まだ御存知やござりませんか」「何をやいなア」「アノいつものおもよどんは、國へお母さんの看病にお歸りになりました」「アツ、さうかい、お母さんの看病で歸つたのか、之れは可哀想に何日歸つたのや」「三日前にお歸りになりました」「三日前……そうか、そうして何日戻るのぢや」「何日戻るのぢやて、モウ代りの女中を斯うやつて、置いて歸つたんだすさかいに再う戻つてやござりません」「何ンや、暇を取つて歸つたのぢやて……エツ、これ私しの寢間を取つてお呉れ、私しわ今この女中の顔を見たので、急に氣分が悪うなつた、モウ御飯はいらん、お膳を引いて、早う寢床を取つてお呉れ、暫く寝るよつて……」といふので、隨分氣の弱い若旦那もあつたもので、床を取らして、お寢みになります、明るる朝御飯を持つて参りますと、食べてやない、晝も、晩も、明るる日になつて、朝飯も、また晝も晩も、その明けの日も同じやう、四五日といふもの御飯を召上らるので、サアお父つさんは御心配、でお醫者サンに診せますると、別に變りはない、こりや氣病ひぢや、と云ふてお歸り遊ばした。その中に十日たつた、二十日經つた、彼は一ヶ月も經つたのですが、御飯粒と云ふものは、一粒も召上らぬ、ドン／＼と衰弱を

して、仕舞にはお藥が咽喉を通りません、水が通らん、湯が通らん、汽車が通らん、飛行機が通らん其んな物は通りませんが、甚らい事になつた、スルと或る日の朝早う、お醫者さんが診察に来て、病人の枕許へ座り込んで、病人を捉へて種々と世間話しをばしてござつたその中に、若旦那の口からしてどうしたはづみか、うつかりと「おもよ」といふ事を口走つたものですから、お醫者さん直に合點して、お父さんにおもよさんに氣を取られて居るといふ事を話しをして、其儘お歸りになりました。サアおもよといふ事を聞出しましたので、お父つさんの喜びは一ト通りぢやござりません「アノこれ／＼、棟梁の甚平になア、用事が出来ました、誰でもよいから、大急ぎで呼びにやつて下さされ、直に來るやうに……」と使ひを走らせました、これを聞きました甚平さん、羽織を引掛けまして、お得意の旦那さまからお呼びですから、直とやつて参りました「ヘイ旦那様、今日は……どうも長らく御無沙汰をいたしました、勝手な時にばかり顔出しをして、平生は何ひみませんで、誠に相濟みませんで御座ります」「イヤ／＼、そんな挨拶は要りませんのぢや、よう來て下さつた、實はなア、甚平さん今お前さんを呼びにやつたのは、他のことぢやないが、お前も知つてるぢやろが、長らく床に就いて居りますアノ倅ぢやがな……」「ヘイ——成程、さうでやすか、そりや何うもお氣の毒な、遂には良うござりませんで……」「何を云ひなさる、まだ死んだのぢやない」「ア、左様か——」「左様かぢやないがな、ところな、喜んで下され、今日まで解らなんだ倅の病氣の、因が知れましたんぢや